

論文

中学生の異性交際の有無とそれに伴う恋愛行動経験とその背景要因

丸井 淑美

本稿は、2002年に調査を行い執筆した修士論文を中心にまとめたものである。7年間の時間経過にともなう中学生の生活状況及び性教育の動向を考慮して、序論及びまとめには加筆・修正を加えたものの、中学生の性行動の特徴は本質的には大きく変化していないことを踏まえ、教育学研究室紀要第8号に投稿することにした。

I 序論

中学生は、二次性徴の発現にともなう不安や悩み、戸惑いを感じている反面、性についての興味・関心をいだいており、特定の異性と交際をする生徒も少なくない。しかし、その交際は多様であって、生活や発達に与える影響についても両性間の好ましい関係が物事に対する積極的な意欲をわかせることもあるが、反面に、情緒的な不安定をもたらし、学校生活や学習に不適応を生じさせたりすることもある。¹⁾また、身体的・生理的な知識や異性に対する理解の不足、性的な自己の確立が不十分なために、安易に性行動を体験し、心身ともに傷ついたり、望まない妊娠をする者や性感染症に罹る者もいる。

青少年の性に関する問題は、正しい知識を理解したからといって望ましい行動がとれるとは限らないところにある。それは性の問題の多くが、他の保健行動と異なり、相手との関係性において自らの意思決定や行動選択を行うところに特徴があるからである。性行動が活発になる思春期後期の青少年に対しての性教育が十分な効果をあげているとはいえない現在、その前段階にある中学生には、よ

り日常生活に密着し、発達に応じた性教育の取り組みが必要である。そのためにも中学生を取り巻く環境や彼らの行動様式を正しく理解することが親や教師にとって必要不可欠である。

思春期の性行動における研究をみると、取り上げられた要因、調査対象、調査地域に相違はあるものの、若者の性行動の発達や性意識、異性交際、恋愛について多くの報告がみられる。

財団法人日本性教育協会は²⁾、1974年からこれまでほぼ6年おきに6回にわたって、「青少年の性行動全国調査」をしてきた。この調査では、青少年の性経験が性的な関心、デート、キス、性交の順に生じることや、性経験率が近年高まっていることを明らかにしている。

東京都生活文化局の³⁾調査では、東京都に在住する中学生・高校生の異性交際について分析している。その結果によると都内の高校生のうち、「特に親しく交際している異性がいる」男子28%、女子33%で、彼らの交際は多岐にわたっていた。

東京都幼稚園・小・中・高・心障教育研究会⁴⁾の調査では、中学生の特定異性との交際について、中3では男子80%、女子85%が「異性と親しくしたい」と思うとしている。

松井は⁵⁾、大学生の恋愛行動はいくつかの側面に分かれるが、大きく五段階を経てほぼ1次元的に進行することを示した。また、堀らは⁶⁾、高校生の性行動を規定する要因として、友人・家庭・学校・マスコミをあげている。

財団法人日本性教育協会では⁷⁾2005年に最近の「青少年の性行動全国調査」を行って

いるが、その結果、性交初体験の年齢について、大学生では男性で16歳、女性で18歳が最も高率となり、高校生では、男女共に16歳が最も高率となったことを明らかにしている。このことから、異性交際が活発になり始めるのが高校生の年齢であるとする、その前段階にある中学生にとって、異性交際や恋愛は対人関係の基礎を築く重要な時期であるといえる。

一方で、中学生の異性交際には、家庭・友人・学校といった環境や青年に特有の心理が関与していることが予想される。先行研究においては、デート・キス・性交経験率が示されているが^{2,3,4,6)}、さらに中学生を取り巻く生活や心理と異性とのかかわりを検討する必要があると考えられる。

そこで、本研究では中学生の異性交際経験の有無とそれに伴う恋愛行動経験に焦点をあて、中学生の異性交際及び恋愛行動を規定する背景要因として「環境的要因」と「心理的要因」⁸⁾をとりあげ、それらの関連について検討を試みた。

1 研究目的

- 1) 中学生を取り巻く環境、心理、異性交際・恋愛行動の実態を明らかにする。
- 2) 中学生を取り巻く環境、心理と異性交際との関連を明らかにする。
- 3) 中学生を取り巻く環境、心理と恋愛行動との関連を明らかにする。
- 4) 中学生の異性交際・恋愛行動を規定する要因を明らかにする。

II 対象及び調査方法

1 対象

対象者は、狭山市内の公立中学校に通う中学生とした。事前に調査依頼文を学校長に配布し、同意が得られた学校で調査を行った。

調査校は、狭山市内三校の公立中学校で A

校 364 名、B 校 206 名、C 校 201 名、合計 771 名である。回収率は 100%で、調査当日登校していない生徒は対象外とした。

2 方法

自記式質問紙 集合法（実施場所は教室）

回答は無記名にて行い、プライバシー保護のため本人が解答用紙を封筒に入れて密封し、クラスごとに回収した。

3 期間

2002 年 6 月～7 月

4 調査内容と尺度

1) 基本的属性

性別、学年を取り上げた。

2) 環境的要因

(1) 学校環境

学校環境の項目は、部活動の所属、授業理解度、部活動の楽しさ、友だちづきあいの楽しさ、相談できる先生の有無を設定した。

(2) 友人環境

友人環境の項目は、同性・異性の友人の有無、友人との同調、友人への非干渉、友人に対する自己開示を設定した。(以下、友人同調、友人非干渉、友人自己開示とする。)

友人同調では、中学生の友人との同調傾向を測定するための尺度として、福富ら⁸⁾により開発された友人同調尺度を採用した。

友人非干渉では、中学生の友人への非干渉傾向を測定するための尺度として、福富ら⁸⁾により開発された友人非干渉尺度を採用した。

友人自己開示では、中学生の友人への自己開示の程度を測定するための尺度として、福富ら⁸⁾により開発された友人自己開示尺度を採用した。

(3) 家庭環境

家庭環境の項目は、同居家族の有無、父・母・親に対する感じ方、家庭における性の話

題の有無を設定した。

父・母・親に対する感じ方では、中学生の親への愛情を測定するための尺度として、福富ら⁸⁾により開発された親への愛情尺度を採用した。本尺度の項目は、父親に対する感じ方、母親に対する感じ方、親（両親）に対する感じ方の13項目から構成されている。中学生の生活環境の中で家庭は重要な場となっている。特に、親子関係は、中学生の意識や行動に対して多大な影響を及ぼしていると考えられる。「性」に関わる要因の一つとして、家庭環境、特に親との関係が上げられることも多い。本研究においても、愛情のない家庭、存在感のない親などを関連要因と考え、その他、親への感じ方と合わせて検討したい。

（4）情報環境

情報環境の項目は、携帯電話・PHS、自分専用の電話・パソコン・テレビ・ビデオ、個室といった、通信機器等所有の有無を設定した。

3）心理的要因

（1）性に対する興味・関心

性に対する興味・関心の項目は、性について知りたい内容を設定した。

（2）私事主義（ミーイズム）

中学生の私事主義（ミーイズム）を測定するための尺度として、福富ら⁸⁾により開発された私事主義（ミーイズム）尺度を採用した。私事主義（ミーイズム）には、自分のことのみを考える傾向や、楽しければそれでいいといった自己中心的で享乐的な側面が含まれていると考えられる。⁸⁾ 本尺度は、関心の狭さ5項目、享楽主義4項目、現在重視3項目、将来無関心3項目から構成されている。本研究では、刹那的に、今自分のことのみを考え、社会や他者については考慮しない態度が、現代の中学生にどの程度みられるのか測定したいと考えた。

（3）自己認識欲求

中学生が、普段の生活の中でどの程度自分を知りたいと感じているのかを測定するための尺度として、上瀬²²⁾により開発された自己認識欲求尺度を採用した。

（4）自己存在感のなさ

中学生の自己存在感のなさを測定するための尺度として、福富ら⁸⁾により開発された自己存在感のなさ尺度を採用した。

（5）ぬくもり希求

青少年心理研究では、進んだ異性交際を行う若者の心理背景に、人とのぬくもりを求める気持ちがあることが指摘されている。

本研究では、中学生のぬくもり希求を測定するための尺度として、福富ら⁸⁾により開発されたぬくもり希求尺度を採用した。

（6）非行規範意識

問題行動念慮では、先行研究^{3,6,8,23,24)}より家出念慮、退学念慮、自殺念慮、対教師暴力念慮、薬物使用念慮の5項目を設定した。

非行規範では、中学生の非行規範を測定するための尺度として、内山ら²⁵⁾により開発された非行規範尺度を採用した。本研究では、尺度を中学生用に一部修正し、非行規範意識の測定を行った。

4）行動的要因

（1）異性交際の実態

異性交際の実態の項目は、異性交際の有無、交際開始時の自分と相手の年齢、恋愛行動経験の有無、交際開始のイニシアティブ、交際相手の人数、交際希望の有無、交際に対する抵抗感を設定した。

恋愛行動経験の有無では、中学生の恋愛行動経験の進行度を測定するために、松井⁵⁾により開発された恋愛行動の5段階を採用した。本研究では、尺度を中学生用に一部修正し、恋愛行動経験の測定を行った。

また、恋愛行動経験の進行度を以下のように評定した。まず、すべての段階の最大値と最小値の幅が均一になるように回答を算術計

算する段階で標準化を行った。具体的には、各段階に対する個人の回答を単純加算し質問項目数で除する算術平均値を使った。その結果、段階ごとに回答が 0～1 の間に分散するように設定した。その値に各段階の数値（一段階ならば 1、五段階ならば 5）を乗算して得られた五つの値を、さらに単純加算して恋愛行動経験の進捗度とした。

交際開始のイニシアティブでは、「自分から」「相手から」「どちらともなく」の 3 件法を用いた。交際に対する抵抗感では、「本人同士がよければかまわない」「少し抵抗がある」「絶対によくない」の 3 件法とした。

（2）性行動の実態

性行動の実態の項目は、性経験の有無、性交に対する意識、性風俗・性情報への接触の有無を設定した。

性交に対する意識では、「結婚するまで性交すべきではない」「婚約者同士なら性交してもよい」「愛があれば性交してもよい」「愛がなくても性交してもよい」の 4 件法とした。

5) 要因分析の手法

各要因間の関連性については、 χ^2 検定（独立性の検定）を行った。平均値の比較については、t 検定を行った。

中学生の異性交際・恋愛行動に影響を及ぼす要因分析には、数量化理論Ⅱ類を施行した。中学生の交際経験の有無・恋愛行動経験を目的変数に、研究枠組みに示した関連要因を説明変数として用いた。数量化理論Ⅱ類は、比較的多くの説明変数やカテゴリーを同時に用いることができ、説明変数の影響の大きさと向きを示す係数も算出され、その意味の理解も容易にできる利点をもつため、この方法を用いた。

III 結果と考察

1 狭山市中学生における各要因の実態につ

いて

1) 環境的要因

（1）学校環境について

授業理解度では、約 8 割以上の生徒が授業をおおむね理解しており、部活動も友だちづきあいも楽しいと感じていた。相談できる先生の有無では、「いる」と応えた生徒が約 35% であり、教師生徒間の関係の希薄さがうかがえる結果となった。

（2）友人環境について

友人では、男女とも約 95% が同性の友人を、約 44% が異性の友人を有していた。また、男女とも約 73% が何でも話せる同性の友人（親友）を有している。

友人に対する同調性については、学年が上がるごとに同調性が低くなる結果となった。上野²⁷⁾は、現代においては、仲間集団への同調性と心理的な密接さが必ずしも一致していないことを報告している。本研究でも、低学年の方がより外面的な行為の同調性が強い傾向にあると考えられる。

さらに、女子の方が男子より、異性のことや自分の悩み、将来のことについて友人に話す自己開示傾向が強いことが明らかになった。

（3）家庭環境について

父・母・両親への愛情は、男女とも学年が上がるにつれて低くなる傾向がみられた。思春期の青年は、自我のめざめが生じ、自分自身に関心を持つと同時に、それまで親を通して得てきたものの見方に疑問を持ちはじめ、心身ともに親から独立しようとし始める。この現象は、心理的離乳といわれ、親子関係からみた思春期における青年の心理的特長としてあげられる。²⁸⁾ 本研究でも、特に 1 年生で父・母・親への愛情が高かったのは、この特徴を反映しているものと考えられる。

また、「私は親から十分愛されていると思う」約 52%、「将来、両親のような家庭を築きたい」約 26% となり、今の家庭に十分満足しているとはいいがたい結果となった。この

結果をふまえ、相談できる先生の有無、友人環境の解析結果と比較すると、相談事などはまず始めに同性の友人に話す可能性が高いことが予想される。

(4) 情報環境について

財団法人日本性教育協会²⁾の報告(1999年)では、携帯電話・PHS所有が、中学生男子9.4%、女子11.7%であった。本調査では、同所有割合が男子約21%、女子約38%と高い比率を示している。(図1)これは、近年の携帯電話・PHSの急速な普及によるものと考えられる。

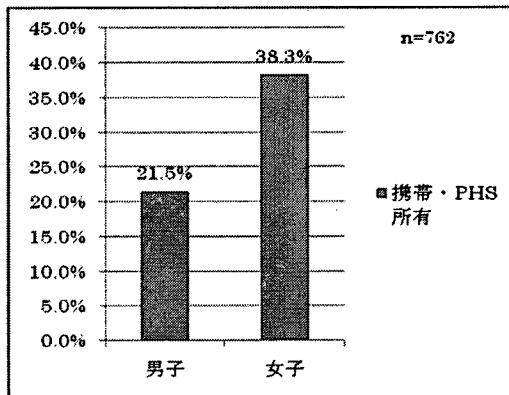


図1 携帯電話・PHSの所有率

2) 心理的環境

(1) 性に対する興味・関心について

性について知りたい内容は、「異性交際」の21%が最も高率となった。次に、男子では「性交」約18%、「性欲」約11%、女子では「男女の心理や行動」「性同一性障害」が共に約17%と続いた。男女を比較すると、男子は生理的な欲求に、女子では心理的な事柄に興味・関心が分かれる結果となった。この結果は、財団法人日本性教育協会²⁾が報告した結果とほぼ同様の傾向を示している。

恋愛に関するイメージは、学年が高くなるほど肯定的なイメージが強くなった。このことは、「性」というものが特別視したり、隠したりする必要のない経験として、青少年の中に組み込まれつつあることを示している。²⁾

(2) 私事主義(ミーイズム)について

男子では、「社会のことを考えても仕方がない」「自分さえよければよいと思う」といった関心の狭さや、「二度と来ない今が大切だ」といった現在重視の傾向が強かった。一方女子では、「今が楽しければそれでよい」「将来のことを考えてそれにしぼられるのは不自由だ」といった将来無関心の傾向が強かった。

福富ら²⁴⁾は、「今を大切にしたい」という感覚が女子高校生の間に共通した心理であると報告している。本研究でも、ほぼ同様の傾向を示し、狭山市の中学生にも私事主義(ミーイズム)的傾向があることがわかった。

(3) 自己認識欲求について

自己認識欲求では、女子の方が男子よりも有意に高得点群の比率が多い結果となった。つまり、女子の方が男子よりも自己認識欲求が強い傾向にあり、自分に関する情報を積極的に取り入れようとすることを示している。

(4) 自己存在感のなさについて

男子の2・3年生において、自己存在感のなさが有意に高かった。また、女子においても、有意差はなかったがほぼ同様の傾向を示していた。先行研究⁸⁾との比較でも、ほぼ同様の平均得点となった。

(5) ぬくもり希求について

女子では60~70%が高得点群となり、人とのぬくもりを求める気持ちが強い傾向であることが示された。また、男子では学年が上がるごとにこの傾向が強くなる。

福富ら²³⁾によれば、女子高校生は切実な自己存在感のなさを抱くものは少ないが、しかし、「私はかけがえのない存在だ」の肯定層は3割で、自分の存在価値を自信を持って主張できる者は少ない、としている。本調査の中学生においても、「私はかけがえのない存在だ」とした者は「あてはまる・ややあてはまる」合わせて約25%であり、同様の傾向を示している。

(6) 非行規範意識について

問題行動念慮では、学年が上がるごとに各

念慮も高率となった。特に女子では、家出念慮と自殺念慮において男子よりも高い傾向がみられた。各念慮は、必ずしも直接問題行動に結びつかない面もあるが、生活状況やストレス等がきっかけとなって問題行動に移行する可能性は考えられる。

非行規範では、学年が上がるごとに非行行動に対する規範意識が低率となった。援助交際を「悪い」としたのは全体で約 70%であった。

3) 行動的要因

(1) 異性交際の実態について

交際経験の有無では、男子約 22%、女子約 25%が特定の異性と交際した経験があった。学年が上がるにつれて交際経験率が高率となり、特に、2 年生で交際経験率が急激に増加している。(図 2)

交際開始時の自分の年齢は、13 歳が約 38%で最も多く、交際経験のある女子の 70%が 12 歳と 13 歳に交際を開始していた。

恋愛行動経験では、交際経験を有する者の半数以上は、相手に相談事をしたり、用も無いのに電話やメールをした経験を有していた。(図 3) 松井ら⁵⁾は、230 名(大学生)を対象として恋愛行動の経験について調査し、青年の恋愛行動はいくつかの側面に分かれるが、大きく五つの段階を経て、ほぼ一次的に進行することを報告している。本調査でも同様の結果を示し、中学生の恋愛行動が友愛的な会話やプレゼントの交換、用も無いのに電話やメールをするといった段階から進展していることが特徴づけられている。

一方、恋愛行動経験進行度からみると、中学生は異性と交際をしている自覚があっても、具体的な恋愛の行動としては会話や登下校を一緒にする等の行動にとどまり、キスや性交に進展する比率は少ないことが明らかになった。

交際経験のイニシアティブでは、「自分か

ら」告白をする割合は、女子約 38%と男子約 26%よりも高率であった。また、告白をするのが「自分から」「相手から」を合わせると約 78%となり、中学生の異性交際は告白することにより異性との交際が始まることを示している。

交際に対する抵抗感では、「本人同士がよければかまわない」約 92%、「少し抵抗がある」約 7%、「絶対によくないと思う」約 1%となった。大部分の中学生が、本人同士がよければ交際してもかまわないと考えていることが明らかになった。

(2) 性行動の実態について

ここでは、交際相手とは限定せずに性経験の有無をたずねた。男女を比較すると、いずれの経験についても女子の経験率が男子を上回る結果となった。先行研究²⁾との比較では、デート・キス・性交経験のいずれも全国調査の結果を下回る結果となった。

性風俗・性情報への接触では、雑誌やマンガ、アダルトビデオ、アダルトサイトの視聴で、男子の経験率が女子よりも高率となった。

性交に対する意識では、「結婚するまで性交すべきではない」約 26%、「婚約者同士なら性交してもよい」約 21%、「愛があれば性交してもよい」約 48%、「愛がなくても性交してよい」約 5%となった。およそ半数が中学生でも「愛があれば性交してもよい」と考えている。

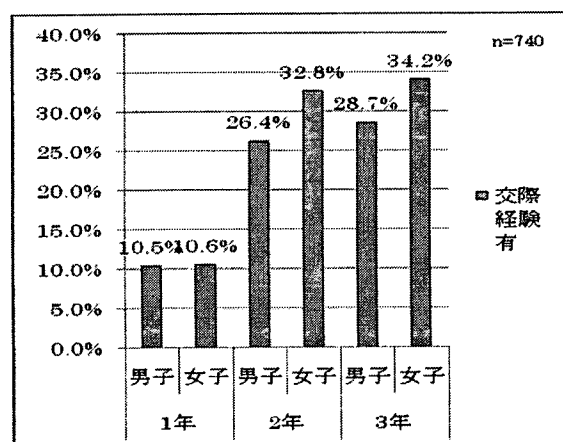


図 2 異性交際の有無

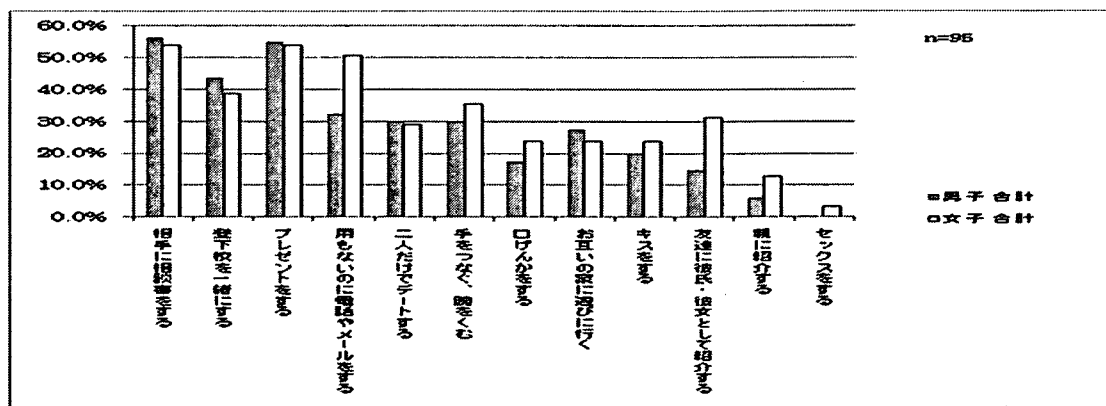


図3 恋愛行動経験の有無

2 各要因間の関連性

1) 狭山市中学生の異性交際の背景要因

(1) 環境的要因と交際経験の有無との関連

①学校環境と交際経験の有無との関連

学校環境の各要因間と交際経験の有無に有意な関連はみられなかった。しかし、男子交際経験有群は、「授業が理解できない」「友だちづきあいは楽しい」と正の相関があり、女子交際経験有群には、「部活動は楽しくない」「相談できる先生はいる」と正の相関がみられた。

②友人環境と交際経験の有無との関連

異性の友人がいる者または異性の友人をほしいと思っている者ほど交際経験率が高かった。また、異性の親友がいる者ほど交際経験率が高く、有意な関連がみられた。この結果は、東京都生活文化局の³⁾報告した結果とほぼ同様の傾向を示している。

友人自己開示では、交際経験のある者の方が、友人に対して自己開示する傾向が有意に高かった。つまり、交際経験のある者の方が、友人に異性のことや自分の悩み、将来のことについて友人に話す傾向が強いことを示している。

③家庭環境と交際経験の有無との関連

家庭における性の話題では、家庭で性の話をしたことのある群での交際経験有群が約28%と、家庭で性の話をしたことのない群の約22%より高率となり、有意な関連がみられ

た。これは、交際経験有群の子どもの性に対する興味・関心が高く、子から親に対して質問している場合と、親が子の異性交際の状況を案じて話題を提供している場合とが考えられる。

同居家族では、特に女子の父と同居していない群で、交際経験率が高く有意な関連がみられた。

父、母、両親に対する愛情と交際経験の有無に有意な関連はみられなかった。

④情報環境と交際経験の有無との関連

交際経験有群で、携帯電話・PHSの所有率が有意に高かったことから、携帯電話・PHSは通信機器として異性交際に影響を及ぼす一要因となることが示唆された。

(2) 心理的要因と交際経験の有無との関連

①私事主義（ミーイズム）と交際経験の有無との関連

現在重視、将来無関心、享楽主義、関心の狭さと交際経験の有無に有意な関連はみられなかった。

②自己認識欲求と交際経験の有無との関連

交際経験有群の方が交際経験無群より自己認識欲求平均得点が有意に高かったことから、交際経験有群の方が普段の生活の中で、より自分を知りたいと感じていることを示している。

③自己存在感のなさや交際経験の有無との関連

自己存在感のなさや交際経験の有無に有意な関連はみられなかった。

④ぬくもり希求と交際経験の有無との関連

交際経験有群の方が交際経験無群よりぬくもり希求平均得点が有意に高かったことから、交際経験有群の方が人のぬくもりを求める気持ち強いことを示している。

⑤非行規範意識と交際経験の有無との関連

問題行動念慮では、家出・退学・自殺・対教師暴力・薬物使用の各問題行動をしたいと思ったことがある者の方が、同問題行動をしたいと思っただけでなく交際経験率も有意に高かった。東京都生活文化局³⁾の報告によると、問題行動傾向と性経験は強い関連があるとしている。本研究でも、問題行動念慮と交際経験の有無は有意な関連を示していた。

非行規範では、交際経験無群の方が交際経験有群より各種の非行行為に対して悪いことだとする規範意識が有意に高かった。

(3) 行動的要因と交際経験の有無との関連

①性風俗・性情報への接触と交際経験の有無との関連

性風俗・性情報への接触では、交際経験の有る者の方が交際経験のない者より、性風俗・性情報への接触率が有意に高かった。

②性交に対する意識と交際経験の有無との関連

性交に対する意識では、交際経験の有る者の方が交際経験のない者より、性交に対する意識が開放的であることが示された。

2) 狭山市中学生の恋愛行動の背景要因

(1) 環境的要因と恋愛行動経験との関連

①学校環境と恋愛行動経験との関連

部活動の楽しさでは、全体と女子において、部活動が楽しい者ほど恋愛行動経験低得点群が高率であった。つまり、部活動が楽しくない者ほど恋愛行動経験が多い結果となった。

相談できる先生の有無では、男子は、相談

できる先生がいない者ほど恋愛行動経験は少なかった。

②友人環境と恋愛行動経験との関連

友人環境では、特に女子で、恋愛行動経験低得点群の者の方が、友人に同調する傾向が高く、また、恋愛行動経験高得点群の者の方が、友人に対して干渉しない傾向が強かった。つまり、女子では恋愛行動経験の多い者は、友人に対してあまり同調せず、干渉もしないという特徴を示している。

③家庭環境と恋愛行動経験との関連

家庭環境では、特に男子で、恋愛行動経験高得点群の者の方が、親を尊敬し、親から愛されているという意識が高く、また、母を尊敬し、母から愛されているという意識が高かった。つまり、男子では恋愛行動経験の多い者は、母や親に対する愛情が強いことを示している。

④情報環境と恋愛行動経験との関連

携帯電話・PHS、パソコン、テレビの所有と恋愛行動経験には有意な関連性はなかった。

(2) 心理的要因と恋愛行動経験との関連

①私事主義（ミーイズム）との関連

現在重視、将来無関心、享楽主義、関心の狭さと恋愛行動経験には有意な関連性はなかった。

②自己認識欲求と恋愛行動経験との関連

自己認識欲求と恋愛行動経験には有意な関連性はなかった。

③自己存在感のなさや恋愛行動経験との関連

自己存在感のなさや恋愛行動経験には有意な関連性はなかった。

④ぬくもり希求と恋愛行動経験との関連

ぬくもり希求と恋愛行動経験には有意な関連性はなかった。

⑤非行規範意識と恋愛行動経験との関連

問題行動念慮では、女子では「先生を殴りたい」と思ったことがある者の方が、恋愛行動経験が多い傾向であることを示していた。つまり、女子では恋愛行動経験の多い者は、

学校や教師に対して不満や反発心を持つ者が多いことが考えられる。

非行規範では、恋愛行動経験低得点群の方が恋愛行動経験高得点群より各種の非行行為に対して悪いことだとする規範意識が有意に高かった。

3 狭山市中学生の異性交際と恋愛行動に影響を及ぼす要因

今回、異性交際・恋愛行動に影響を及ぼす要因の検討には数量化Ⅱ類を用いた。なお、今回用いた数量化Ⅱ類の限界としては、説明変数について、有意性の検討を行うことができない点である。²⁶⁾しかし、その分析の結果から、影響要因となっている項目及び、その影響の強さを明らかにすることができたため分析方法として妥当であると判断し、使用した。

1) 異性交際に影響を及ぼす要因

男子の異性交際に影響を及ぼす要因については、第一に「携帯電話・PHS」が、次に「何でも話せる異性の友人」があげられた。「携帯電話・PHS」を所有していること、「何でも話せる異性の友人」がいることが、男子の交際経験有に作用していた。また、女子の異性交際に影響を及ぼす要因については、第一に「携帯電話・PHS」が、次に「母への愛情」、「相談できる先生」があげられた。「携帯電話・PHS」を所有していること、「母への愛情」が低いこと、「相談できる先生」がいることが女子の交際経験有に作用していた。

今回の結果から、男女の異性交際に影響を及ぼしている共通の要因として携帯電話・PHSがあげられた。携帯電話・PHSについては、先に述べたように、交際経験の有無に有意な関連がみられている。その理由としては、携帯電話・PHSが、孤立した空間を確保した上での会話やメール交換といった異性と

の通信手段として、異性交際に大きな役割を果たしてしているものと考えられる。

2) 恋愛行動に影響を及ぼす要因

男子の恋愛行動に影響を及ぼす要因については、第一に「自己存在感のなさ」が、次に「問題行動念慮」「携帯電話・PHS」「テレビ」があげられた。つまり、「自己存在感のなさ」が低く、「問題行動念慮」が高く、「携帯電話・PHS」「テレビ」を所有していることが、男子の恋愛行動経験高得点群に作用していた。また、女子の恋愛行動に影響を及ぼす要因については、第一に「テレビ」が、次に「父への愛情」、「何でも話せる同性の友人」「母への愛情」があげられた。つまり、「テレビ」を所有していること、「父への愛情」が低いこと、「何でも話せる同性の友人」がいないこと、「母への愛情」が低いことが、女子の恋愛行動経験高得点群に作用していた。

今回の結果から、男女の恋愛行動に影響を及ぼしている共通の要因として「テレビ」があげられた。財団法人日本性教育協会²⁾は、青少年の性情報源について、友人の他にマンガ・コミックス、テレビ・ラジオのマスメディアをあげている。狭山市の中学生もテレビを媒介として様々な情報を取り入れており、それが恋愛行動に影響を及ぼしていると考えられる。また、これは自分専用の「テレビ」であるため、深夜まで自由にテレビを見ることが出来る環境や経済的な理由も考慮しなければならない。

IV まとめ

本研究は、狭山市の公立中学校に通う中学生を対象として、中学生の異性交際・恋愛行動に影響を及ぼす背景要因について分析を試みたものである。分析の視点として、中学生を取り巻く学校・友人・家庭環境や現代青年に特有の心理を設定した。これは、中学生の

異性交際・恋愛行動をできるだけ多くの要因から総合的にとらえたいと考えたからである。そこで、各要因がどのように中学生の異性交際・恋愛行動に影響を与えていたか、調査結果及び考察をふまえ、次のようにまとめる。

1 狭山市中学生における各要因の実態

狭山市の中学生は、教師に相談事をしたり、親のような家庭を築きたいと感じている者は約30%だった。その反面、約75%の生徒に何でも話せる友人がおり、相談ごとや性に関する話し相手として友人を選ぶ可能性が高いことを示唆している。

父・母・親への愛情では、1年生と2・3年生の間に開きがみられた。このことから、対象者の心理的離乳期が1年生と2年生の間にあることが考えられる。

中学生の恋愛行動は、友愛的な会話やプレゼントの交換、用も無いのに電話やメールをするといった段階から進展していることが特徴づけられた。また、恋愛行動経験進捗度からみると、中学生は異性と交際をしている自覚があっても、具体的な恋愛の行動としては会話や登下校を一緒にする等の行動にとどまり、キスや性交に進展する比率は少ないことが明らかになった。

2 狭山市中学生における環境的要因・心理的要因と異性交際との関連性

異性交際と他要因との関連性においては、特に異性の友人、友人自己開示、ぬくもり希求、携帯電話・PHSの所有と有意な関連があった。つまり、交際経験のある者は交際経験のない者より、友人との関係に深い関わりがあったといえる。また、下位項目を見ると、交際経験のある者は数の上でも友人関係に恵まれているといえる。

3 狭山市中学生における環境的要因・心理的要因と恋愛行動との関連性

恋愛行動経験と他要因との関連性において、男子では、特に相談できる先生、母・親への愛情と有意な関連があり、女子では、部活動の楽しさ、友人同調、友人非干渉、対教師暴力念慮に有意な関連があった。つまり、男子は、恋愛行動経験の多い者は、学校においては、相談できる先生はいないが、家庭においては、母や親への愛情は強いことが示された。一方、女子では、恋愛行動経験の多い者は、部活動が楽しくなく、友人に対してあまり同調せず、干渉もしない、また、教師に対して不満や反発心を持つ者が多いことが特徴づけられた。

4 狭山市中学生における異性交際・恋愛行動に影響を及ぼす要因

1) 異性交際に影響を及ぼす要因

数量化Ⅱ類の結果から、異性交際に影響を及ぼす要因として携帯電話・PHSがあげられた。その理由としては、携帯電話・PHSが、電話やメールといった異性との通信手段として、異性交際に強く影響しているものと考えられる。

携帯電話・PHSと性行動の関連は従来から指摘されていたが、その実証的な研究は少なかった。今回は、そのことを実証的に確認できたといえる。

2) 恋愛行動に影響を及ぼす要因

数量化Ⅱ類の結果から、男子では、自己存在感のなさ、問題行動念慮、携帯電話・PHS、テレビがあげられ、女子では、テレビ、父への愛情、何でも話せる同性の友人、母への愛情があげられた。つまり、男子と女子では、恋愛行動に影響を及ぼす要因に固有の特徴がみられた。また、今回の結果から、男女の恋愛行動に影響を及ぼしている共通の要因としてテレビがあげられた。中学生はテレビを媒介として様々な情報を取り入れており、それが恋愛行動に影響を及ぼしていると考えられ

る。東京都生活文化局の報告では、性情報の「信用度」や「肯定度」が性行動を促進しているとしている。中学生が、メディアから受ける情報をどう評価するかが、その後の行動や情報の受けとり方に大きく影響する可能性がある。³⁾

5 今後の課題と展望

1) 調査結果から導き出された指針

今後の課題として、親や教師をはじめ、思春期の中学生と接する周囲の大人たちは、まず中学生の性的発達とその男女差を理解することが大切である。また、中学校においては、異性交際を含む人間関係に関する心理学的知見を性教育の中に取り入れることが必要である。つまり、異性交際及び恋愛行動の背景にあるぬくもり希求や身近な環境への不適應や不満感といった青少年特有の心理に着目した性教育を行うことが重要であると思われる。

現在も青少年の性行動は、早期化・低年齢化が進行しているといわれている。²⁾10代の性交初体験年齢が16～17歳で最も高率である⁷⁾ことや、前述のように恋愛行動経験が段階的に進行することから勘案すると、中学生で異性交際経験のある者は近い将来性交を体験することが予想される。しかしながら、調査を行った三つの中学校では、性感染症の予防や避妊について具体的な指導をしていた中学校は一枚もなかった。このことから、今後中学校では、人間関係における自己決定能力の育成やコンドームの使用方法等について、より具体的な性の学習を行う必要があると考えられる。

さらに、中学生の異性交際は友人との関係に深い関わりが認められた。しかし、中学生の間で性の問題が起きた時に、友人同士では解決できない問題も多いはずである。中学生が無料で相談ができる公的な思春期クリニックやウェブサイトの設立、ピアカウンセラーの養成も急がれる課題である。同時に、親や

教師をはじめ、周囲の大人たちは、思春期の中学生と接する際に、まず子どもっぽさへの不安や心もとなさを許容すると同時に、半ば大人の能力を獲得した存在として彼らの尊厳を保障し、その発言に耳を傾けていくことが大切である²⁹⁾と思われる。

2) 今後の課題と展望

今回の調査は、中学生の異性交際と恋愛行動の実態とその背景要因を把握することにより、現在の中学生のニーズに対応した学校における性教育の一助となることを目指して行った。

しかし、時間とともに変化する環境要因に応じて若者の行動様式も変化するため、定期的な調査や心理的要因の抽出などを的確に行う必要がある。具体的には、プロフ等をはじめとするインターネット上のコミュニケーションが、中学生の日常生活の重要な情報源として存在していることなどを踏まえ、2002年当時はなかった新たな枠組みを整理し直していくことも必要になってきた。

今後は、中学生以外の発達段階の子どもたちや性の多様性にも注目して系統的な調査を行うとともに、性教育とのかかわりについて考えていきたい。

引用文献

- 1) 文部省：学校における性教育の進め方考え方，文部省，pp. 13，(1999)
- 2) 財団法人日本性教育協会：「若者の性」白書，小学館，pp. 207，(2001)
- 3) 東京都生活文化局：大都市高校生の性をめぐる意識と行動，東京都生活文化局，pp. 149，(1984)
- 4) 東京都幼稚園・小・中・高・心障性教育研究会；児童・生徒の性，学校図書，pp. 13，(2002)
- 5) 松井豊：心理学評論，33 (3)，pp. 355～370，(1990)
- 6) 堀洋道，松井豊：高校教育展望，7 (9)，pp. 140～150，(1982)
- 7) 財団法人日本性教育協会：「若者の性」白書，小学館，pp. 203，(2006)
- 8) 福富護：(財) 女性のためのアジア平和基金報告書，(1998)
- 9) ミルトン・ダイヤモンド アーノ・カーレン：人間の性とは何か，小学館，pp. 149～152，(1989)
- 10) 石濱淳美編著：新版セクソロジー辞典，メディカ出版，pp. 258，(1994)
- 11) John Maney Herman Musaph：性科学大事典，NISHIMURA，pp. 325，(1985)
- 12) 福富護：学校保健研究，39 (10)，pp. 456～460，(1988)
- 13) 福富護：思春期学会，13 (2)，pp. 148～153，(1995)
- 14) 国立公衆衛生院保健統計人口学部「人間と性」教育研究所，虎ノ門病院産婦人科：思春期学会，13 (3)，pp. 243～248，(1995)
- 15) 戸田弘二，松井豊：心理学研究，56 (5)，pp. 288～291，(1985)
- 16) 竹村和久：日本社会心理学会第 28 回大会発表論文集，62 (38)，pp. 62，(1987)
- 17) 竹村和久：日本社会心理学会第 28 回大会発表論文集，62 (39)，pp. 38，(1987)
- 18) 松井豊，井上果子，宮武朗子，鈴木信子：

日本教育心理学会第 37 回総会発表論文集，pp. 465，(1995)

- 19) 松井豊，井上果子，宮武朗子，鈴木信子：日本教育心理学会第 37 回総会発表論文集，pp. 466，(1995)
- 20) 松井豊，井上果子，宮武朗子，鈴木信子：日本教育心理学会第 37 回総会発表論文集，pp. 467，(1995)
- 21) 松井豊，木賊知美，立澤晴美，大久保宏美，大前晴美，岡村美樹，米田佳美：東京都立立川短期大学紀要，23，pp. 13～23，(1990)
- 22) 上瀬由美子：心理学研究，63 (1)，pp. 30～37，(1992)
- 23) 櫻庭隆浩，松井豊，福富護，成田健一，上瀬由美子，宇井美代子，菊島充子：教育心理学研究，49 (2)，pp. 167～174，(2001)
- 24) 宇井美代子，福富護：東京学芸大学紀要 1 部門，49，pp. 93～101，(1998)
- 25) 内山絢子：犯罪と非行，92，pp. 26～52，(1992)
- 26) 古谷野亘：多変量解析ガイド，川島書店，pp. 114～125，(2001)
- 27) 上野行良，上瀬由美子，松井豊，福富護：教育心理学研究，42 (1)，pp. 21～28 (1994)
- 28) 加藤隆勝編：思春期の人間関係，大日本図書，pp. 33～40，(1997)
- 29) 健やか親子 21 検討会健康・体力づくり事業財団：健やか親子 21 検討会報告書，pp. 1～7，(2002)

参考文献

- 30) 望月良美：思春期学会，17 (2)，pp. 204～209，(1999)
- 31) 近森けいこ：JASS Proceedings，13 (1)，pp. 20～31，(2001)
- 32) 久野孝子，衛藤隆，小林正子，下方浩史：学校保健研究，41，pp. 309～319，(1999)
- 33) 高田百合子，新井利栄，高村寿子，松本清一：思春期学会，12 (3)，pp. 268～275，

- (1994)
- 34) 喜多村望：思春期学，11 (2)，pp. 185～191，(1993)
 - 35) 斉藤益子，木村好秀：思春期学会，17 (2)，pp. 263～271，(1999)
 - 36) 入谷仁士，木村龍雄，野地照樹，山本和代，下村美佳子：学校保健研究，42，pp. 245～255，(2000)
 - 37) 白石淑江，天野敦子：思春期学，13 (4)，pp. 304～312，(1995)
 - 38) Karin Coyle, Karen Basen-Engquist, Douglas Kirby, Guy parcel, Stephen Banspach, Elizabeth Baumlner, Marsha Weil：Journal of School Health, 69 (5)，pp. 181～188，(1999)
 - 39) Deborah Nahom：Journal of School Health, 71 (4)，pp. 153～158，(2001)
 - 40) 木村龍雄，皆川興栄，園山和夫：思春期学会，14 (3)，pp. 309～317，(1996)
 - 41) 和田実：思春期学会，18 (4)，pp. 361～371，(2000)
 - 42) 木村龍雄，皆川興栄，西種子田弘芳，喜多村望，三井淳蔵，益子詔次，植田誠治，野津有治，園山和夫：学校保健研究，37，pp. 86～400，(1995)
 - 43) 志賀くに子：母性衛生，39 (4)，pp. 351～355，(1998)
 - 44) 上田公代，薙野ミエ子，尾道三一，宮崎俊作：母性衛生，39 (4)，pp. 351～355，(1998)
 - 45) 久野孝子，館英津子，小笠原明彦，下方浩史，山口洋子：日本公衛誌，49 (10)，pp. 1030～1038，(2002)
 - 46) 武田真太郎：産婦人科治療，81 (2)，pp. 134～138，(2000)
 - 47) 井上聡子，廣井正彦：産婦人科治療，81 (2)，pp. 125～129，(2000)
 - 48) 武田敏：思春期学会，20 (1)，pp. 27～32，(2002)
 - 49) 内田貞子，高村寿子：思春期学会，19 (1) pp. 52～57，(2001)
 - 50) 北村邦夫：思春期学会，13 (2)，pp. 129～134，(1995)
 - 51) 松田智美：思春期学会，19 (1)，pp. 68～74，(2002)
 - 52) 加藤則子：思春期学会，19 (3)，pp. 273～277，(2001)
 - 53) 土井徹：思春期学会，19 (3)，pp. 248～259，(2001)
 - 54) 富田和巳：思春期学会，20 (1)，pp. 9～13，(2002)
 - 55) 上田公代：思春期学会，13 (2)，pp. 122～128，(1995)
 - 56) 宮城重二：やさしい実践統計学，光生館，(2000)
 - 57) 柳井久江：エクセル統計，オーエムエス出版，(2001)
 - 58) 島内憲夫，助友裕子：ヘルスプロモーションのすすめ，垣内出版，(2000)
 - 59) 宗像恒次：行動科学からみた健康と病気，メヂカルフレンド社，(1992)
 - 60) 深谷昌志：子どもの規範意識を育てる，教育開発研究所，(2002)
 - 61) 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千尋編：セルフ・エスティームの心理学，ナカニシヤ出版，(2001)
 - 62) A.W. ポープ S.M. ミッキヘイル W.E. クレイグヘッド共著：自尊心の発達と認知行動療法，岩崎学術出版，(1999)
 - 63) 福富護：性の発達心理学，福村出版，(1983)
 - 64) 小倉千加子：セクシュアリティの心理学，有斐閣，(2001)
 - 65) 柏木恵子，松田星，宮本美沙子，久世敏雄，三輪弘道：親子関係の心理，有斐各新書，(1981)
 - 66) 山本和代，加藤千佐子：育ちあう家族，宣協社，(1996)
 - 67) 町沢静夫：自分を消したいこの国の子どもたち，PHP 研究所，(2001)
 - 68) ヴォッコ・ニスカネン，橋本紀子訳：人間と人間たち，群羊社，(1984)

- 69) 松本清一監修 高村寿子編著：性の自己決定能力を育てるピアカウンセリング，小学館，(2000)
- 70) 村瀬幸浩：ニューセクソロジーノート，十月舎，(2000)
- 71) 日本家族計画協会：世界の若者 2000，日本家族計画協会，(2001)
- 72) 財団法人日本性教育協会：若者の性はいま，(財)日本性教育協会，(1997)
- 73) 財団法人日本性教育協会：女性の性的自己決定，(財)日本性教育協会，(1998)
- 74) 保健体育審議会：生涯にわたる心身の健康の保持増進のための今後の健康に関する教育及びスポーツの振興のあり方について(保健体育審議会答申)，保健体育審議会，(1997)
- 75) 日本学校保健会編：エイズに関する指導の手引き，第一法規，(1993)
- 76) 東京都幼稚園・小・中・高・心障性教育研究会：児童・生徒の性，学校図書，(1999)
- 77) NHK「日本人の性」プロジェクト編：NHK日本人の性行動・性意識，NHK 出版，pp. 224，(2002)